

その上に主の霊がとどまる

イザヤ書 11：1－10



司祭 ヨハネ 井田 泉

降臨節第2主日
2025年12月7日

上野聖ヨハネ教会にて

今日の礼拝が始まる時、わたしは入口に立って、オルガン前奏を聞きながら正面の十字架を見つめ、また礼拝堂全体を見ていました。すると何かが上の方から降^ふってくる、何かがこの空間に下^おりてくるような感じが起こりました。

それは今日の旧約聖書の言葉によるものだったと思います。

降臨節第2主日。旧約聖書日課はイザヤ書の第11章でした。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで

その根からひとつの若枝が育ち

その上に主の霊がとどまる。」11:1-2

「エッサイの株」「エッサイの根」(11:10)。これはクリスマスの聖歌72番の元になっている箇所です。

♪ エッサイの根より 生^おいいでたる くすしき花は 咲きそめけり／わが主イエスの 生まれたまいし このよき日よ

今日のイザヤの言葉は、救い主イエス・キリストの到来を予告するものとして読まれ、また歌われてきました。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで

その根からひとつの若枝が育ち

その上に主の霊がとどまる。」

これは遠い昔、預言者イザヤが語った言葉です。より正確に言えば、イザヤが神から靈感を受けビジョンを示されて歌った言葉、というほうがよいかもしれません。今日は、ここでイザ

ヤが何を語ったのかに聞き入ってみましょう。

「**エッサイの株**」「**エッサイの根**」とは何でしょうか。エッサイとはダビデ王のお父さんの名前です。ベツレヘムの人でした。エッサイの息子ダビデがイスラエルの王となり、その子孫が代々王位を継承してきたのがユダ王国です。イザヤが生きた時代は、何度か王様が交代しているのですが、この預言が語られたのはおそらく、アハズという王様の時です。すでにユダ王朝（ダビデ王朝）は250年以上続いていました。

ところがイザヤが神から示されたのは、この王朝は滅びる、ということでした。本来イスラエルの王というのは、神様の求められるところを行って人々の安全と平和を守ることが使命でした。ところが現実にはエッサイの子孫アハズ王がやっていることは、軍備の増強、戦争の準備です。弱い人々はうち捨てられ、偽りが横行し、富める者はますます富み栄え、貧しい者はますます苦しめられている。力ある者は神を畏れることを忘れ、自分の利益ばかりを追求している。このような国は滅びる、というのが、イザヤが神から示されたことだったのです。

「**エッサイの株**」というのは、エッサイの子ダビデ、またその子孫から成長した大木のようなユダ王朝は、やがて倒壊してもう切り株しか残らない。そういうことがやがて起こるという、

恐ろしい預言だったのです。このようなことを言うイザヤは、王家や貴族から当然憎まれ、迫害を受け、口を封じられることになります。

けれども大切に聞きたいことは、ここでイザヤが神様から示された将来の希望を語っているということです。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで

その根からひとつの若枝が育ち

その上に主の霊がとどまる。」

切り倒されてもう朽ちたと見えたそのエッサイの切り株。そこから「ひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育つ。それはダビデ王朝が再び復興するということではなく、ダビデの信仰を継承する神の僕が、救い主として誕生し、成長する、という預言です。

これが約700年後に実現する。それがイエス・キリストの誕生です。

「その上に主の霊がとどまる」。

神から遣わされた方の上に、主の霊がとどまる。その方は神の力に満たされ動かされて、神様の願いを実現していく。

「主の霊」という言葉を心にとめながら、イエスの誕生物語を思い出してみましょう。おとめマリアは聖霊によって身ごもった（マタイ 1:18, 20）。30歳になられたイエスがヨルダン川で

ヨハネから洗礼を受けたとき、天が裂けて神の霊が鳩のように^{くだ}降ってきてイエスにとどまった（マルコ 1:10）。そしてナザレの会堂礼拝に出席して、聖書を朗読するために立たれたとき、この箇所が目にとまりました。

「主の霊がわたしの上におられる」ルカ 4:18

朗読後、イエスは「この聖書の言葉は、今日実現した」と語り始められます。

イエスの歩みと働きは、主の霊とともにありました。そしてその最後、十字架の上に死なれるとき、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」（ルカ 23:46）と叫ばれた。ご自分の霊であるとともに、元々は神様から受けた霊を、神に返しゆだねて、生涯を閉じられました。このようにイエス・キリストの誕生、生涯、そして死は、主の霊と深く関わっていたことを知らされます。

もう一度イザヤ書第 11 章に戻ってみましょう。救い主にとどまる主の霊とはどういうものでしょうか。

「その上に主の霊がとどまる。

知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊。

彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。」11:2-3

主の霊は、「知恵と識別の霊」です。何が本物であって何が偽物か。何が正しくて何が間違っているか。主の霊はそれを深いところから見分けさせ、判断させる。

主の霊を受けると、思慮と勇気が与えられる。神様のことははっきりとわかり、同時に神を畏れ敬うことが起こる。「主を畏れ敬う霊に満たされる」とき、心は静かにされて、慰めと平安と感謝と喜びが満ちてきて、神を愛し畏れ敬うことが起こる。

主の霊を受けたイエスがこの世界の現実をご覧になったとき、心がうずくように痛んだ。悲しむ人、不当に苦しめられている人々への共感共苦が湧き起こって、じっとしていられなかった。立ち上がって行動せずにはいられなかった。

「彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず／耳にすることによって弁護することはない。弱い人のために正当な裁きを行い／この地の貧しい人を公平に弁護する。」11:3-4

「正義をその腰の帯とし／真実をその身に帯びる。」11:5
これがイエスのなされたことです。

日本語で「正義」というと、居丈高で自己絶対化のような響きを感じることがあるかもしれません。しかし聖書のいう正義はそうではありません。ひどい目に遭わされて苦しむ人々とともに苦しみながら、その人々の安全を守り、傷を癒やし、損なわれた尊厳を回復する。それが神の正義です。ですから「正義」と「恵み」と「救い」は一体というか、重なり合うのです。

そして最後に実現するのは平和の世界です。

「狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。／子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。」 11:6

現実にはあり得ないことのようにですが、イザヤは神からありありと平和のビジョンを示されて、その光景を語ったのです。

今日はイザヤ書第 11 章をとおして、昔イザヤが神から示されたビジョンと言葉に触れました。それは救い主イエス・キリストの姿と働きを示すものでした。

けれども、それだけではありません。

「その上に主の霊がとどまる。」

わたしたちの上にも主の霊がとどまる。わたしたちも、救い主に注がれた主の霊がとどまるのです。わたしたちは、イエスの祈りと信仰と働きを継承する者なのです。

洗礼に続く堅信式において、わたしたちは主教によってこう祈られました。

「どうか、この僕（ら）に聖霊を満たし、知恵と理解、深慮と勇氣、神を知る恵みと神を愛し敬う心を与えてくださいアーメン」 祈祷書 293 頁

文語の祈祷書では、さらに言葉が加えられていました。

「また主をかしこむ霊を常にみたしたまえ」 430 頁

この祈りは、今日のイザヤ書の言葉から来ています。主の霊

が救い主イエス・キリストにとどまったように、このわたしたちにも主の霊がとどまるように。そのように祈られた者。事実、主の霊を宿されたのがわたしたちなのです。

そのゆえにわたしたちは、今日高まりつつある排外主義に呑み込まれません。戦争肯定の声に惑わされません。弱らされた人々を支えようとして歩み、神が与えてくださる平和の希望を抱いて生きていきます。

祈ります。

神様、どうか主の霊を受けられた救い主の姿を見つめさせてください。わたしたちにも同じ霊が宿されていることを教えてください。わたしたちに新しくあなたの霊を注いで、勇気をもって平和のために歩ませてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン